
気ままに。

美織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気ままに。

【Zコード】

Z3745W

【作者名】

美織

【あらすじ】

”黒ネコ族”の師匠は自由気ままに旅をするのが好き。その日も弟子に稽古場を任せて一人放浪の旅へ。「貴様に会うとこれだから……」いくら悪態をついても出会ってしまったものはしようがない。一番嫌いな気ままじゃない旅に出る。感想等いただけると嬉しいです。

嫌がらせの出会い（前書き）

師匠って、どんな格闘技やるんでしょうか？ 作者も知りません。稽古場は一応弟子が5、60人いる設定です。……師匠、そんなとこほつといいいんですか？ よろしければ感想をお願いします。」それからの参考にするので。

嫌がりせの出金

トントンとリズムを刻むよつこ、右へ左へ軽くステップ。くるりとターンして相手の背後へと回りこむ。

「はい、おしまい」

相手の背中に容赦なく手刀をたたきこむ。背中に衝撃をくらつた少年はバランスを崩してその場に崩れ落ちる。少年が私を見上げながらちよつと涙目になりながら笑いかけた。

「師匠、相変わらずお強いですね。少しは手加減してください」

「最年少で師範代やつてるやつが何言つてんの。しかしまだ一段と強くなつたわね」

「ありがとうござります！」

こくら師範代といつても中身はまだ10歳そいそいの少年だ。頭の上の耳を嬉しそうにぴょこぴょこと動かした。彼は素早さで名の通る”白ネコ族”の少年だ。

「じゃあ、そんな強いリア君に後のことはずべてお任せして、私はまた放浪の旅にでも出よつかな」

「そんな、ひどいです！ 師匠！」

「じゃ、後は任せたぞ、師範代」

後ろでリアが何か（泣き）叫ぶ声が聞こえたような気もするが、無視してさつさと歩きだす。自由気ままな”黒ネコ族”。それが私の一つ名だ。私は機嫌よく頭の上のきれいな三角形の耳をぴょこぴょこと動かした。

「わい、リアのやつもからかってきたし、今日は何しよつかな」森の中の一本道をとことこと歩きながら、機嫌良く鼻歌を歌つてみる。そういえば以前、リアに師匠に機嫌が悪い時はあるのかと聞

かれたことがあつたな。たぶんない。ただ一つの例外を除いて。

「……何の用だ。黒いの」

「おやおや、相変わらず貴女は機嫌が悪いですねえ。同じ”黒ネコ族”じゃないですか」

「誰が貴様とつ」

「まあまあ落ちついて。また出たそりですよ、あいつ。つこでに僕の名前はミカゲです」

「貴様が来るとすぐこれだ。だから嫌なのよ」

名前のこととはさらりと無視。先のことが思いやられながらも、一応話は聞かなければならぬ。

「で、どこに出たつて？」

「（こ）から北にある”黒の森”です」

「遠……。しかも故郷か。一応伝言御苦勞をま。わつわと帰れ」

黒いのにわつわと背を向けて、北を田指して歩き始める。今回はちょっと遠いから帰るのは遅くなるだろつ。心の中でリアに謝る。いじりに帰れなくてごめん。

「……何のつもりだ？ 黒いの」

「だから僕はミカゲですつて」

私はありつたけの殺意を込めて腕にひつついたものを睨みつけた。黒いのはリアよりも1、2つくらい年上だ。その分体も大きい。リアでさえ今がギリギリなのだ。それ以上のものは正直”遠慮願いたい。

「離れる、黒いのー」

「（だから、僕はミカゲです）今回は”黒ネコ族”的故郷ですよ。帰るついでについていきます」

一人で気ままに旅するほうが断然好きなんだけどな……。仕方がないか。

「死んでも置いていくがいいな、黒いの」

「（だから）（省略）かまいません。自分の身くらい自分で守れます」

「……仕方がない。行くぞ、黒いの」「…………（ハア）」

そんなこんなで、北の”黒い森”に到着。途中黒いのが崖から落ちかけたりしたような気もするが……、まあ氣のせいだらう。現に息を切らしながらも私の後ろにいるしね。

「貴女は僕を殺す氣ですか！？」

「そんなつもりは一切無かつたんだけどな」

「……通常1週間の距離を2日で走破。これを殺す氣じゃないと言うんですか」

「……さてと、さつさと片付けて帰ろっかな」

とりあえず黒いのはその場に置いて、さつさと森の中に入つてしまつことにした。

「待つてくださいよ。どこに出たかも知らないのに勝手に森の中に入らないでください。だいたい貴女は子の森から……」

「分かってるわよ。私がもうこの森からは歓迎されないことくらい」今度こそ森の中に入つていぐ。今度は黒いのも文句を言わずに歩いてきた。何よ、急におとなしくなっちゃつて。さつさと今までみたいにギヤー、ギヤー騒いでればいいのに。

「……こんなところだけ、やつぱりリアよりも大人よね」

「？ 何か言いました？」

「別に、何でもないわよ。で、あいつが出たのつて、何処？」

「（こ）からさらに北にある”あの洞窟”です」

「……。あいつもいい趣味してんじやない」

思わずため息をついてしまった。あいつに会うとこうだけで気が滅入るのに、まさかあそこにいるなんて、嫌がらせとしか思えない。 「行くしかないのよね、嫌でも」

珍しく何も言わず、黒いのは黙つて私の後に着いてきた。

嫌がらせの出会い（後書き）

次回は『あいつ』の正体が判明します！ たぶんリア君はここでお別れです。気にいつてくれた方がいればまた出すかもしれません……。

私とあるこいつ（前書き）

今回は監修の過去の話がメインとなつております。ちょっとシコアス氣味です。こんなはずじゃなかつたんだけどな……。

私とあいつ

森の入口から走って10分。私たちは岩壁にぽつかりと黒い口を開けたような洞窟の前に立っていた。

「さてと、『ご対面といきましょうか。危ないからあなたは外で待つてなさい』

「自分の身くらい自分で守れると言つたはずです。どうぞ』心配なさらずに』

いつもならそのまま付いてこさせるとこだが、今回はいつもこかない。

「黒いの、この中には何がいるのか分かつてんの？」

「分かつてますよ。貴女に伝えたのは誰だと思つてんですか」

「いちいちムカつく奴ね。分かつてんなら外にいなさい。いいわね」黒いのにくるりと背を向けて洞窟の中へと入つていく。そつと黒いの様子をうかがうと、ちゃんと外にいた。それだけ確認すると、私は歩く足を速めて洞窟の奥へと向かった。

「しつかしここは10年前から何にも変わらないわね」

私が最後にここを訪れたのは10年前、私が7歳の時だった。

「そして、あんたは10歳だつたわよね」

この洞窟の一番奥に広場のようになつているところがある。そこ のさらに奥に、一つの人影があった。私はその人影に殺意をこめた視線を送る。

「久しぶりだね、カララン。会えて嬉しいよ」

「私は嬉しくないわ。もう一度とあんたになんか会いたくない。父様と母様を殺したあんたになんか

「つれないな。俺はお前の兄だろ？』

「お前なんかつ……！」

怒りに震える私の様子なんかお構いなしに、10年前に縁を切った兄、リュウセイが私のほうに近づいてくる。

「俺はずっとお前に会いたかったぞ、カラーン」

「私をその名で呼ぶな！」

「おつと、これはあの日に君が捨てた名だったか」

あの日。私の人生で最悪の日。一瞬たりとも忘れたことはない。

この洞窟で、

「お前が父様と母様を殺した日だ……！」

「カラーン！ それから出かける時間よー！」

「はい、母様！」

私は手に持っていた帽子を急いで被ると、玄関で待つ母のところへと走つて行つた。

「カラーン、帽子が曲がってるぞ。ちょっとじじつとしてる」

「ありがとう、兄様。さあ、行こう！」

私は母様と兄様の手を掴むと、元気よく外へ飛び出した。

「こらこら。カラーン、そんなに急ぐと転んでしまうぞ」

「平気だもん！ あつ」

「だから言つただろう」

そう言つて転ぶ直前に私を抱き上げてくれたのは父様。

「えへへ。」「めんなさい。父様大好き！」

父様にギュッとしがみつくと、父様は肩車してくれた。

「さ、ちょっと急ぐぞ。今日は大事な儀式の日だ。遅れたら大変なことになる」

”黒ネコ族”の子供は7歳になると一人ひとり自分用の短刀を贈られる。”黒ネコ族”にとって短刀とは誓いをたてるときに使う神圣なものであり、自分の短刀を持つということは一人前と認められることだ。

「やつと族長の愛娘が7歳を迎えたんだ。今日の祝祭は盛り上がるぞ」

今回儀式で短刀を贈られるのは全部で11人。その中でも族長の娘である私は最後に父から短刀を受け取る。

「リュウセイが7歳を迎えた時のことを思い出すな。あの時も長男だということで盛り上がったな。今から楽しみだ」

「大丈夫だよ、カララン。別にそんなに緊張するものでもないから」「そうよ。ちゃんと”宣誓の言葉”は覚えたわね」

「はい！」

最後に短刀を受け取る者は、”宣誓の言葉”といって、”黒ネコ族”として誇りを守つて生きていくことを誓わなければならない。だいたい”宣誓の言葉”を言つるのはその儀式を受ける者の中で最も身分の高い者だ。

「三年前の兄様、かつこよかつたなあ。私も兄様みたいに頑張る」「そうそう。そのいきだ。頑張れよ、カララン」

そうしていろいろうちに、儀式がおこなわれる”母なる洞窟”へとたどり着いた。この洞窟は”黒ネコ族”がすむ森の中でも最北端に位置し、儀式のとき以外では例え族長でも立ち入ることは許されていない。儀式を迎える子どもたちは、順番に洞窟の中へと入つて行き、その奥で待つ族長から短刀を受け取る。

「それじゃ、私たち先に洞窟で待つてあるから。リュウセイ、カラランを頼んだわよ」

儀式の準備をするため、父様と母様は先に洞窟の中へと入つて行つた。

「カララン、他の子たちはもう並んで待つてる。僕たちも行こう」

儀式を待つ子たちの中に混じつて一人でいると、急に不安になつて周りをきょろきょろと見回すと、兄様と目が合つた。兄様は優しく微笑むと、手を振つてくれた。それだけで、不安が吹き飛んだ気がした。

儀式の順番を待つ間、いろんな人から祝福の言葉をもらつた。それにいちいち笑顔で答えるのは疲れたけど、家族のためだと思って乗り切つた。

「次、族長の娘、カラーン」

「はい」

副族長に名前を呼ばれて洞窟の中へと入る。この先に父様と母様がいるはずだ。確かに受け取つて外に出たらそのまま演説台に上つて”宣誓の言葉”だったよな。頭の中で何度も繰り返し練習した言葉をもう一度復習する。洞窟の広場が見えてきた。もうすぐ私の儀式が始まる。

私とあいつ（後書き）

ちなみに、キャラの名前に漢字をあてると、

カラ
ン 花藍

リュウ
セイ 流星

ミカ
ゲ 御影

リア 李亜

となります。師匠にはもう一つ名前があります
るかと……。その「いつか」へ

あの日から（前書き）

今回も過去の話がメインです。あの事件とその後の話です。

広場の奥の一段高くなつた所に、父様と母様がいた。二人ともにつっこりと笑つて私を待つてゐる。

「おめでとう、カラーン。さあ、儀式を始めるわよ」

母様がひと振りの短刀を捧げ持ち、それを恭しく父様が受け取る。父様は私のほうへと向き直ると、その短刀を私に差し出した。

「これは命を奪うものではなく、誓いを守るものだ。生涯をかけて己の誇りと大切な者との誓いを守れ」

「はい」

私は短刀を受け取ると、それを両手で抱え込むようにして持つ。これで私は一人前として認められた。外でそれを宣言するため、私は出口のほうへと足を向けた。

「待て」

急に父様が私に静止の声をかけた。目を閉じて、じつと何かに聞き耳を立ててゐる。どんな音もたてちゃいけないような気がして、私は息をひそめた。自分でも耳を澄ませてみる。

「足音？」

儀式中、洞窟の中へは儀式を行うもの、行われるもの以外の立ち入りを固く禁じられている。よつて、一族のものではありえない。

「！？ 逃げる！ カラン！」

父様が何かから私をかばうように立ちふさがつた。瞬間何かが刺さる音がした。

「あ～、はずしちゃつたか。まあいいや。後は族長一家だけだしね」

「兄、様？」

父様を挟んだ向こう側にはそこにいるはずのない兄様が立つていた。その足元には母様が倒れていた。

「兄様、母様から血が出てる。早く助けてあげて！」

「何言つてるんだ、カラーン。これは僕がやつたんだよ。あの女ひとが復

活するためにには父上も母上も邪魔だったからね。もちろん、カラーン、お前もだよ」

「……、リュウセイ、やめる。実の、……妹、だぞ」

「父上、まだ生きてらしたのですか？」しぶといですね

兄様が手の中でクルクルと短刀を回しながら私たちのほうへ近づいてくる。

「兄様やめて！ 短刀は命を奪つためのものじゃない、って父様が「何言つてるんだい、カラーン。短刀つていうのはね、こうこう風に使うためにあるんだよ」

「やめて！！」

私は父様と兄様の間に立つた。

「カラーンそのうち君にも分かるようになるよ」

その時、なぜ兄様が私の鳩尾に短刀ではなく手刀を叩き込んだのか、私はいまだに分からぬ。私の意識は一瞬で真つ暗な暗闇に飲み込まれた。

「あの後、私は父様と母様の遺体と一緒に発見された。そこには血のこびり付いた私がもうはずだつた短刀が落ちていた。そしてあんたは行方不明。その後は想像がつくでしょ。私は一族から追放された。親殺しの罪でね」

無意識にギュッとこぶしを握る。当時、何も訳が分からないまま森の外へ放り出され、何度も獣に襲われかけた。今稽古場を持つほど腕を鍛えたのはその頃からだ。

「何であの時私を一人と一緒に殺さなかつた！ あの時の苦しみは

……思い出したくもない」

何かから自分を守るように、自身の体を抱きしめる。足元に視線を落とし、寒気が消えるのをじっと待つ。そこでふと影が差した。

「お前が必要だつたんだ。強くなつたお前がな

急いで顔を上げると、至近距離にあいつがいた。そして、昔のよう

に私の頭を優しく撫でた。

「触るな！」

手を払いのける。不用心に相手を近づかせた自分の無防備さを呪つた。こいつの前だと調子が狂う。

「東の森へおいで。そこでお前を待つてる。すべてはそこが始まるから」

「待て、用事はまだ……」

どこかに隠し通路でもあるのか、あいつの姿が一瞬で消えた。

「くそ。どうして私はいつもこうなのよ……」

自分の悪態をつきながらも、いつまでもここにいる必要はないので出口へと向かう。広場の出口に、人影があるのが見えた。

「終わりましたあ？ 今回は会えたみたいですが、また逃げられたんですねえ」

「私は洞窟の外にいると言つたはずよ、黒いの」

「それは僕の自由です。で、東の森に行くんですか？」

「行くしかないでしょ。さてと、いつまでもここにいたら他の奴らに見つかっちゃう。さつさと退散しないと」

「僕も行きますよ」

「結構よ」

黒いのをその場に残し、私は一人洞窟の外に出た。

あの日から（後書き）

次回、師匠（たち）は旅に出ます。あの子も再登場、……しますかね？ 次回からは「メイテイ風にしたいと思います。シリアルは苦手だつ！

第2の故郷（前書き）

意外とリア君が好評だったので再登場します。相変わらず師匠にいじめられています。

「ただいまー！ リア、元気にしてた？」

「師匠！？ お帰りなさい！」

まるで子犬のように駆け寄ってきたのは稽古場を任せているリア

だ。『白ネコ族』特有の白い尻尾をパタパタと元気よく振っている。こいつは生まれる種族を間違えたらしい。

「今日はわりと早かつたですね。これから稽古つけてくれるんですね

か」

「うーん、それがね、またこれからすぐに出かけなきゃいけないのよ。今回またマジで長期になるから一回顔見せに戻ってきたというわけ

「そんなん……。僕またお留守番ですかあ？」

いつもはポンと元気よく立っているリアの耳がしおれた。

「そんなこと言つてもね、リア以外に師範代任せられる奴いないしじゃあ、頑張つてね」

にっこり笑つて肩をポンと叩くと、リアはその場にしゃがみこんで地面上の字を書き始めた。可愛いからそのままにしておこう。「よし、お前らー。久々に私が稽古つけてあげるわ。順番に並びなさい」

稽古場の奥のほうでそれぞれ稽古していた少年少女たちが一斉に駆け寄ってきた。

「今日は師匠が稽古つけてくれるんですか！？ 僕が一番！」

私が、僕がと騒ぎ立てる子どもたちを眺めまわしてすっと深く息を吸う。

「順番！ 全員相手してあげるから、一人ずつ並びなさい！」

今度は素直に返事して一列に並ぶ子どもたち。先頭の少年が一步前に出てお願いします、と頭を下げる。

「あら、入ってきた時よりもずっと礼儀正しくなったんじゃない

「リア師範代は礼儀にだけは厳しいですから」

なるほど、あいつのおかげか。私が教えるよりもずっととい。

「リアも、何で私に習つてあんなに礼儀正しくなれたのかしら。奇跡としか言いようがないわね」

実際私が直接教えた奴らはリアを除く全員が好戦家だ。まあ、リアも訓練だけなら組み手とかを嬉々としてやるのだが。礼儀関係も教えた記憶がない。

向かってくる子どもたちに足払いをかけながらそんなことを考える。体制を崩した子どもたちを片つ端から投げ飛ばす。もちろん加減してだが。

「つて、ちょっとあんたたち！ 一人ずつって言つたでしょ！？」
稽古場はもう乱戦状態だ。背後からも誰かが近づいてくるのが分かった。

「甘いわよ、リア！」

背後から近づいてきたリアの腕をとつて投げとばす。

「ちえ、ばれましたか。さすが師匠です」

結構本気で投げたのに平然と受け身をとつて即座に立ちあがるリア。

「あんた、また強くなつたわね。師匠として嬉しいかぎりだわ」

「光榮です！」

そう言つていきなりリアが飛びついてきた。反射で受け止めてしまった。すぐに周りの子供たちが師範代だけずるい！ とかよく分からぬこと言つて一斉に飛びついてきた。

「お前らやめる！ 稽古にならないじゃない！ つか真面目に私死ぬ！！」

5、60人の子どもたちに押しつぶされて思わず悲鳴を上げる。

もうただのじやれあいだ。

「あなたたちは何やつてるんですか」

呆れた顔をして稽古場に入ってきたのは外で待っていたはずの二力ヶだ。

「あ、ミカゲさん！　お久しぶりです」

すぐにリアが反応してぴょこんと立ち上がる。せついえぱこいつは一時期ここに稽古場に通っていたな。ちなみにリアの兄弟子。私が師範代にしようと思つていたら、やめていきやがつた。だから実力は実質リアよりも上だ。私には到底かなわないがな！

「そろそろ出発しないと日暮れまでに隣の村に着きませんよ。まあ、夜の森で狼たちと乱戦しながら行きたいのなら別にかまいませんけどねえ」

ミカゲが言う狼とは”狼族”のことだ。夜行性で私たち”ネコ族”とはあまり、というよりもかなり仲が悪い。夜の森をうろついていると必ずと言つていいほど襲われる。

「別に襲われても追い返すだけだから別にいいけど、面倒臭いわね。じゃ、私出発するわ」

まだ引っ付いている子どもたちを引き？がしながら稽古場の外へと向かう。バイバイ師匠！　とか言いながら手を振つて見送つてくれる子どもたち。……いい子どもたちをもつたわ、私。

ミカゲを伴つて稽古場を出ると、誰かが服の裾を思いつきり掴んだ。突然のことにバランスを崩しかけながらもその掴んだ相手を睨みつける。

「どうこうつもりかしら？　リア

「僕はダメなのに、ミカゲさんは連れて行くんですか？」

……ウルウルした目で上目遣いに見上げてくるのは反則だろ？！？　つて、いかんいかん！　可愛いからこそ今回は連れていつちゃダメだわ。

「ダメ。あんたにはあの子たちのこと守つてもらわなきゃいけないんだから。あいつらのこと頼むわよ」

最後に頭をポンポンと撫でて今度こそリアに顔を向ける。

「…………（あいつ付いてくるな）」

「……いい加減出できたら？　いるんでしょう、リア」
稽古場を後にしてかなりのスピードで歩く（いや、あれは走るだ
！　b ソミカゲ）こと3時間。足も止めず、振り向きもせずに背後
に声をかけた。

「……いつから気づいてたんですか？」

「あんたが私たちに追いついたころから」

「……最初からですか」

隠れることをあきらめたのか、消していた気配を元に戻してリア
は私たちに近づいてきた。

「子どもたちはどうしたの？」

「トーマさんに任せてきました。師匠たちが戻つてくるちょっと前
に、フラッシュと帰ってきてそのまま奥で寝てたんですよ」

「あいつ、帰つてきたの」

トーマとは私の弟子の一人で、確かに最年長のはずである。実力は、
私が一番最初に師範代に任命した男だから十分すぎるほどある。
「ま、あいつが帰つてきてるなら心配ないか。帰つてきたときに文
句を言われそうね」

トーマは何故かびっくりするほど私に似ていて、一人放浪の旅を
するのが好きなのだ。でも、責任感は強いほうだから、子どもたち
を放つてどこかへ行つてしまうことはないだろう。

「……帰りにトーマの好きな魚でも持つて帰つてあげるか」

第2の故郷（後書き）

トーマ 冬馬

です。ちなみに、16歳の”虎ネコ族”です。

そのほかのキャラをまとめてみると、

師匠 17歳

リア 12歳

ミカゲ 14歳

リュウセイ 20歳

です。種族は小説の中で説明したとおりになります。

怪しき集落（前書き）

今回も師匠は素晴らしい脚力を見せてくれています。番外編もち
よくつかよくアップしていきます

リアと合流したところから歩いて（走って！　b yミカゲ&am
p.・リア）3時間ほどのところに、一つの集落があった。人（ネコ
？）の気配はなく、荒れた形跡もない。

「っしゃ！　取り放題！」

「いやいやいや、待ってください師匠！　それは悪役のセリフです
から！」

「えー、いいじゃない。誰もいないし。私に拾われて使われるほう
が道具も喜ぶわよ」

「どういう理屈ですか！？　そもそも変だと思いませんか？　こん
なにきれいに残っているのに誰もいないなんて」

「それもそうですね。普通は人が一人もいなくなるのは襲われた時
か、災害の時ですからね。どちらにしてもこれはきれいすぎますね
え」

「むう、あんたたち優秀すぎよ。誰から教わったの、そんなこと」

「立派な反面教師がいましたから」

「……それって、私？」

「一人がほぼ同時にため息をつき、私に背を向けた。何よ、鍛えた
のは私じゃない！」

「リアの言つとおり、これはちょっと怪しそります。流行り病の可
能性もありますし、下手したら入った瞬間苦しむ羽目になりますよ
それは怖い。というわけで私はおとなしく一人の意見を聞くこと
にした。うん、私偉い。

そんなことを考えていると、ミカゲにすぐ冷たい目で見られた。
あいつ、私の心が読めるのか！？

「……貴女の表情は分かりやすすぎます」

「え、そうですか？　僕には全然分かりませんけど

「…………（鈍い師弟め！！）」

ミカゲがさつきよりも深くため息をついている。まあ、それは今に始まつたわけじゃないから放つておいてもいいか。

これじゃ誰が保護者か分からぬ、なんて聞き捨てならないことをぶつぶつ言つていいるミカゲを何とか無視（私偉い！）して、集落から少し距離をとりながらリアに聞いてみる。

「リア、何か聞こえるか？」

「いえ、特に何も。生きているものがいる音はしません」

私たちそれぞれのネコ族には特殊な力を持つ子供がたまに生まれる。リアもその一人で、彼は異常な聴力を持つ。ちなみに私とミカゲ、トーマも持つていて、私は視力、ミカゲは嗅覚、トーマは石や植物、ようするに自然界にあるものから記憶を読み取る。ま、意識して使わないと普通の奴らと同じなんだが。

「そうだな、私が”見て”も動くものはない

「いえ、何かいますよ。何か、……血の匂い？」

「何で疑問形！？ 血の匂いなんてお前一発で分かるだろ！」

「だから普通の匂いじゃないんですよ。たぶんここにいるのはネコじゃない」

ほんの少し、ミカゲの顔が引き締まる。珍しく緊張でもしてるのか？……それにしてもネコじゃないものか。森の中にこうやって集落を作るのはネコの一族しかいない。狼はそもそも大人数で生活するのを嫌うから集落を作るとは思えない。

「もともと住んでいた一族が何かに襲われたのか、それともその前に気がついて逃げ出したのか……。後者だといいな」

「そうですね。僕もここに住んでた人が無事だつたらいいなと思います」

「どうします？ 毒とかウイルスとかがいるような匂いはしませんし、入つてみますか？」

ミカゲが少し悪戯っぽい顔をしながら見上げてくる。これは私を試している顔だな。私の度胸、見せてやるうじやないの。

「なら入つてみよつか。ここ突つ切つたほうが次の村近いし

私の眼にはこの集落をまっすぐ突つ切つた先に村があるのがはっきりと見えていた。

「ちょっと怖くないですか？迂回しましょ、よ。……」

「お、怖がりだね、リア。かーわいい

「！からかわないでください、師匠！」

顔を赤くして拗ねているリアを笑いながら集落の中へと一步踏み出した。後にミカゲ、リアと続く。……数時間後、私たちはリアの意見を聞かなかつたことを後悔することになる。

怪しい集落（後書き）

補足

トーマ君の特殊能力、～記憶を読み取る力～

- 1・木や花、石に触れる。
- 2・意識を集中して知りたい記憶を探す。
- 3・記憶を覗かせてもらう。
- 例）リアがこの石に座つて花占いをしていた。「師匠は帰つてくる、帰つてこない、……帰つてこない！？」リア号泣。
- 4・可哀想な弟弟子を慰める。

巨大生物（前書き）

リア君は相変わらず可哀想な子です。
誤字脱字等を見つけた場合は、隨時直していくので指摘お願いします。

巨大生物

しばらく集落の中を探索した後、中央の広場（たぶん祭典用だろう）に集まって、それぞれの意見を交換することになった。

「私が見たところホントに何もないわ、」。きれいさっぱり人だけが煙のように消えちゃったみたい」

「僕も同じ意見です。地面を歩く音どころか、空気が動く音すらしません」

私とリアが頭を抱える中、黒いのが一人だけ氣難しい顔をしていった。

「おかしい。……」の匂いは一体どこから……？」

「何か分かるのか、黒いの？」

「だからミカゲですってば。……何か変なにおいがするんですよ。血のような違うような……」

突っ込むべきところはしつかり突っ込んで黒いのが答えた。さすがうちで一番の突っ込みだ。リアではまだまだ足りない。

「だいたい、何処から匂うのかもよく分からないんですよ。強いて言つなら、この集落全体から、でしううか」

「うわ、やめてよ。地面掘つたらそこらじゅうから変なもの出でくるとか……。考えただけで寒氣がする」

「地面？……（うわあ、なんかすこくいやな予感が）」

「どうしたんですか？ ミカゲさん」

「リア、お前だけでも先に逃げ……！？」

黒いのがリアに何か言いかけたところで、地面が割れた。

「うわ、何だこりや！ 意外と深いな

「何変なところで感心してるんですか、師匠！」

「二人とも！ 落ちますよ！ 古畠まないよつに口を閉じて……！」

「自分で言つておきながら、噛んだね」

？」

「噛みましたね」

身体能力が総じて高い私たちは特に苦労することもなく、5mほど落ちて着地した。一人だけ私たちに背を向けて口元を手で押さえている黒いのは、まあ、アホなんだろう。

「ひはひ（痛い）。ひはんはつは（舌噛んじやつた）」

「僕、ミカゲさんがこんな間抜けだつたなんて、初めて知りました」

「まあ、私の弟子だからね」

「なるほど」

納得するな！ と私は心中で突っ込んで、一人痛がっている黒いのを無視してあたりを見渡した。黒いのが言つたことが本当ならば、このあたりが匂いの元凶……かもしない。

「……師匠、何か聞こえます。何か、いま聞きたくないよつの音が……」

私もリアが見つめるほうへ視線をやる。しばらくすると、暗闇の先のほうに何かぬめぬめと光る、白っぽいものが見えた。

「ひつ」

隣でリアが小さく悲鳴を上げる。そういうえばこいつ、トーマに似て両生類とか爬虫類とか、ああいう系統のもの、すこしく苦手だったよな。

私たちの目の前には巨大なナメクジのようなものがいた。しかも体中から青い体液のようなものを撒き散らしている。

「気持ち悪……」

「なるほど、匂いの元凶はあれでしたか」

昔から私は目の前にいるものの小さい奴を持つてトーマやらリアやらを追い回しては、正直このサイズまででかくなると気持ち悪い。少なくとも積極的に触りたいとは思わない。

「黒いの、気持ち悪くないの？ 冷静に見えるけど」

「貴女に昔、散々これで追いかけまわされましたから」

だからもう慣れました、と相変わらず可愛くないな。黒いののくせに。

「どうする？ これやつつけないとたぶん」「から抜け出せないよ。ちなみに私は嫌」

「僕は絶対嫌です！」

「僕もできれば触りたくないですね……」

「こんな会話を繰り広げながら、私と黒いのと素早くアイコンタクト。悔しいがこいつは意思疎通というものがしやすい。」

「じゃ、公平にじやんけんで……！」

と口では言つておきながら素早くリアの両手を掴む。ちなみに黒いのは両足を抱えている。また黒いのとアイコンタクトして無言でタイミングを合わせる。

「じゃ、リア、頼んだわよ！」

「普段仲悪いのこ、何でこんなときだけ息ぴったりなんですか！？」

何かリアが泣き「とを言つてこいたような気がするが、いつものことなので無視した。

巨大生物（後書き）

次回、リア君の可哀想なターンが続きます。

新たな敵（前書き）

やつとりア君が解放されたと思つたら、また敵です。久々に師匠の真面目モードが入ります。常にふざけてるからな、師匠つて。たまには真面目になつてもらいました。

最近はミカゲ君も師匠と仲良くなつてきました。もともと師匠はミカゲ君のこと大目に見てるんですよ。照れ屋なんです。好きな子はいじめたくなるというあの原理です。

新たな敵

「嫌ーーー！」

「ほら、頑張つてリア！」

「早くしないと暗くなつて出られなくなりますよ」

巨大ナメクジにリアが挑み始めてから早3時間。リアは逃げてばかりで戦いになつてない。リアの背後の壁際に並んで座つた私と黒いのは時々面白がつて声援という名の茶々を入れる。

「私、こんなナメクジに負けるような鍛え方をした覚えはないわよ！」

「そんなこと言つたつて！ 嫌だ、こいつ気持ち悪いです！ 触りたくないし触られたくない！！！」

「もう、しょうがないわね……」

「お、師匠のお出ましですか」

立ち上がつた私に反応する黒いの。その黒いのを上から見下ろしながら私は不敵に笑う。その顔を見た黒いのが顔を引きつらせる。……さすがは一時期私の弟子をやつていただけはあるわ。いい勘して

「行きなさい、黒いの！」

「えー、僕が行くんですかあ？ ここは可愛い弟子を助けるために師匠が出る場面ではないですか」

「師匠命令よー！」

「もうとつくて貴女の弟子ではなくなりましたけどね。……仕方がない、困つた師弟ですね」

そう言つて懐からやや大ぶりのナイフを取り出して立ち上がる黒いの。

「リア、ちょっとそこどいてくださいーーー！」

リアが黒いの前からどいた瞬間、地面をけつた黒いのがもうナメクジの目前まで迫つていた。そのままナイフを一振り。一撃でナメ

クジを沈める。

「黒いの、もう一度道場戻つてきて師範代やる気はない？」

「嫌です」

あっさり、しかもさわやかスマイル付きで黒いのは言い切った。ここまで綺麗に即答されると帰つてきてもない相手だとしてちょっとムカつくわね。

「何よ、私だつていらあんたが「はい、ストップです」

私がちょっとキしたのを感じたのか、リアがストップをかけてきた。さすが弟子。自分の師匠のこと良く分かってるわあ。

「ミカゲさん、僕の代わりに倒してくれてありがとう」ひれこました。おかげで助かりました

必殺、リアの天使の微笑み。^{ハニジール・スマイル}

この技は老若男女を問わず、すべてのネコに通用する。試したことは無いが、たぶん狼にも効くだろう。もちろん、脇で見ていた私にもしつかり効いている。可愛いなあ。

「……まあ、文句は後でしつかりと、然るべき相手に。とりあえず上に戻りましょう」

黒いのは少し下がると、助走をつけて跳んだ。続いてリアも。：

「足自慢の若いのはいいわ。二人とも元気ね。

「何やつてるんですか、師匠！　早く来てください。これくらい師匠なら余裕でしょ？」

「えー、私も跳ぶの？　リアたちが引っ張つてくれないの？」

「ふざけてないで早く上がってきてください。いつまでもそこにはるとまたナメクジがきますよ。あと2、3匹分くらいの匂いがします」

「それを早く言いなさいよ！」

私は助走無しでそのまま軽く5mほど跳ぶ。余裕で穴を抜けた私を黒いのとリアがジトつとした眼で見つめる。

「……元気じゃないですか、師匠」

「…………（相変わらず嫌な人だ）」

あれで僕たちより強いんだからー、とかリアと黒いのが一人で愚

痴つてゐる。何よ、これでも私はあんたたちの師匠よ。これくらいで出来なきやあんたたちの師匠なんか勤まらないわ。何か文句ある？私が一人拗ねていると、突然リアの耳がピクッと動く。とたんに目を細めて辺りをうかがう私たち3人。さつきまでの弛んだムードは何処へ行つたのやら、全員の顔が厳しいものへと変わつていた。

「東方、1、2……10匹？ たぶん狼です」

「みたいね。10匹なんてそんな大勢でいるところ初めてみたわ。とりあえずこの人数であれを相手するのは面倒ね。隠れましよう」私の眼ははつきりと東からやつてくる狼たちの姿が見えていた。

「あいつらが来るのが東からじゃなかつたら先に進むんだけど……」私たちはもと来た道を音を立てずに駆け戻る。集落の外に出ると、各自手頃な木に上り、姿を隠す。木の葉のおかげでこちらからは狼の様子が確認できるが、あちらからは見えないだろ？

東からやつてきた狼たちは私たちが落ちた穴を覗き込むと、リーダー格つぽい狼が口を開いた。

「いいか、お前ら。ナメクジの溶け具合からまだ奴らはこの辺に居るはずだ。探せ！」

あのナメクジ溶けるのか！ つて、突つ込むところはそこじゃない。あいつら確かに、奴らはまだこの辺にいる、と言つた。奴らとはもちろん私たちのことだらう。

「……まずは」

狼たちは総じて鼻がきく。最初から私たちを探すつもりなら匂いでこちらにすぐ気がつくだろ？

私たちと狼の距離、100m。

新たな敵（後書き）

次回、ちょっと話はシリアルスに。物語が少し進みます。新キャラも出る予定です

双子の狼（前書き）

新キャラ登場です。とはいってもほとんどしゃべりませんwww
そして師匠が大暴れします やつぱり強いです、師匠は。

双子の狼

「師匠、どうしますか？」

「どうするも何も、やるしかないでしょう。ちょっと面倒だけど。あんたたち一人で4人潰しなさい。後は私がやるわ」

「大丈夫ですか？」

「……なめてんの、黒いの？」

いちいちムカつく黒いのは放つておいて、狼たちの背後をとるため、気配を殺しながら移動を始める。幸い私のほうは能力のおかげで敵を見失うことはない。

「さて、誰から潰そうかしら？」

今は誰もいなくて空き家となっている建物の影に隠れて、敵が近づくのを待つ。じぱりすると、一匹近づいてくる。あいつからでいいか。

「！？」

不意を突いて敵の口を塞ぎつつ、影に引っ張り込んで鳩尾に手刀を叩き込む。声もなく沈んでくれた。しかも周りは気がつかなかつたらしい。

周りをこつそりうかがつてみると、あっちもちょうど一匹沈めたところなのか、リアが親指を立ててウインクしてきた。……いちいち可愛いなあ、もう。

そのまま続けて2人ほど沈める。このあたりで相手も異変に気がついたらしい。

だがもう遅い！！

今までいた場所を離れ、敵に気がつかれないようリアたちのもとへ行く。口の動きだけで伝える。

「（リーダー沈めてくるから、後頼む）」

「（了解です）」

……いつか役立つだろ？と思つてこの訓練させておいてよかつた

わ。あの時は単なる遊びだったのに。

私が元の場所に戻つてあいつらに合戦すると、二人は同時に別方向から飛び出す。それぞれ一番近くにいた相手を掴み、投げる。そしてそのまま4人まとめて乱戦へ持ち込む。

……我が弟子ながら良い腕してるな、こいつら。

私のほうもただ見とれているだけではなく、行動を開始する。リアたちに気を取られているリーダー格の奴の背後へ回る。さすがリーダー、私が背後に回つた時点で気がついて振り向いた。

……だから、もう遅いんだって。

「セツ！」

気合いともに回し蹴りを放つ。……あ、掴まれた。でも、

「甘い！」

掴まれた脚を軸に体をひねり、全体重を乗せた回し蹴り。……蹴るのつていいよね。スッキリ

私の渾身の一撃を防ぎきれるはずもなく、側頭部にクリーンヒットする。そのまま崩れるリーダー格。大したことないわね！！

「師匠！ 終わりましたか？」

「今終わつたところよ。そつちは？」

「それが……」

振り向くと、そこには困った顔をしたリアと黒いのが居た。そして、そのやや下に視線を向けると、

「どうしましょう、この子たち」

一目で狼族のそれと分かる犬耳を頭に乗せた男の子と女の子が正座していた。しょんぼりと頃垂れている様を見ると、つい抱きしめてしまいたくなる。

「……これだから貴女は」

黒いのの声で気がついた。私は狼族の一人をまとめて抱きしめていた。だって、可愛いんだもん！！

「あんたたち、名前は？」

「……フィア」

「……フイイ」

「……双子？」

同時に「くつとうなずく双子。女の子のほうがフイアで、男の子のほうがフイイね。

「あなたたち、狼族よね」

「くつり。

「もしかして親いない？」

「くつり。

「私たちと行きたい？」

「くつり。

よし、連れていいつー！

フイアとフイイの手を掴んで立ち上がる。そのまま進もうとして、リアと黒いのに止められた。

「なんでよお。いいじゃない。この子たちが戦つ気なもんがつだし、可愛いし」

「可愛いの関係ありませんからー。狼族の子を連れていくなんて、正氣ですか！？」

「なあに、リア、嫉妬お？ 今まで可愛い系は自分だけだったから、かまつてもらえなくなると思つたんでしょう。大丈夫よ。ちやーんとかまつてあげるからー」

「違いますつて！！ それと誰が可愛い系ですか！？ かまつてほしいなんて一言も行つてませんー！」

「いや、リアは無言でかまつてと言つてこるようなものですからねえ」

「ミカゲさんまでー？ 誰か僕の味方はいないんですか！？」

「うわーー！ と叫び声をあげているリアも双子と一緒に懷に抱え込むと、じつと見つめる。

「……そんなに見つめても、僕はその中に入りませんから

「冷たい」

「どうとでも言つてください」

一人離れたところで拗ねている黒いの（拗ねてない！　bヨミカ
ゲ）は放つておいて、腕の中の三人を力いっぱい抱きしめる。

「ムグウ、し、師匠、苦しい、です」

腕の中リアのうめき声が聞こえた。じつやら力を入れすぎてしまつたらしい。よく見ると双子も顔を真っ赤にして息苦しそうだった。

「うわあ、『じめん』『めん』

手を離したとたん、ゼエハアと荒い息をつく三人。……お、双子の表情が少し柔らかくなつた。落ちついてきたのかな。

「やつと解放されて安堵しているんですよ。いくら狼族とは言え、子供を殺すつもりですか、貴女は。自分の力の大きさをしつかり理解してください」

「うへ、『ごめんさい』

黒いのに怒られた。でも悪いのは私なのできちんと謝る。双子ちゃん、ごめんね。リアも。

「だいたい、貴女は今ちょっとテンション上がりすぎです。落ちついてください」

……しうがないよ、それは。だって双子ちゃんが可愛すぎるんだもん。

双子の狼（後書き）

双子ちゃん、次回からは緊張も解けたのか、ちゃんと喋りますついでに襲撃者たちの謎も明らかになるかと。

ぬこひの筆跡（前書き）

双子ちゃん……可愛いい……
自分で書いておきながらいつのまにどうが……。

あいつの策略

狼の双子が落ちつくまで少し休憩し、一人が落ちついたところで事情を訊くことにした。

「あのねー、ファイアたちはある人に頼まれて来たのー」

「来たのー」

「誰に頼まれたの？」

「ファイアたちには分かんないー」

「分かんないー」

先に話しているのがファイア、後に繰り返しているのがファイ。可愛いんだけど、若干うざいな。慣れるまでの辛抱か。

「で、あんたたちはどうするの？ 狼族のところに戻る？」

「それは絶対に嫌ですー」

「嫌ですー」

双子が泣きながら抱きついてきた。そんなに辛かつたのだろうか、狼族の中での暮らしへ。

さすがに小さい子供が泣いているのは情に訴えるものがあるらしく、リアと黒いのの顔は幾分か柔らかくなっていた。

「私たちはお父さんもお母さんもいないからね」

「いつつもいじめられてたの」

「でもね、今回の”さくせん”で”おでがら”たてたらね」

「族長さまがお父さんの代わりになってくれるって言ってたから」

「自分たちから志願したのー」

「したのー」

私たち3人は言葉を失った。こんなに幼い子供が自分の身を守るために自らこんな危険な作戦に加わったというのだ。その族長がどんな人物なのかは知らないが、おそらくこの双子は騙され、利用されている。

「私たちと一緒にに行こう。大丈夫。お姉ちゃんはとーつても強いの

よ」

そう言つて二人を抱きしめると、二人はにっこりと笑つた。

「ありがとう、お姉ちゃん」

「フィイたちも何か役に立ちたい」

「ありがとう、その気持ちだけで十分よ。リアに黒いのも文句ないわね」

振り返りながら聞くと、二人とも首を縦に振つた。

さて、と。出発する前にもう一仕事するか。無言で黒いのが太い縄を差し出してきた。気がきくな、こいつ。リアも見習えよ。私はまだ気を失っているリーダー格をこれでもかというほどきつく縛りあげた。まだ起きないので軽く頬をはたく。そこで呻きながらリーダー格が目を覚ます。

目を開けること数秒。自分の状態を確認して自分の状況を理解したらしい。話が早くて助かる。

「さあて、洗いざらい吐いてもらいましょうか？」

「…………師匠、目が悪人です」

「貴女の辞書には手加減という言葉がないのですか？」

「敵に対してはね」

「（絶対にこの人だけは敵に回したくない）」「

何もしゃべらないが、気配だけで双子もおびえているのが分かる。敵に女という理由でなめられるわけにはいかないからね。このぐらいがちょうどいいのよ。

「…………と思つたら、

「まったく貴女は……。相手が怯えて口もきけなくなつてゐるじゃないですか。代わってください。僕がやります」

何やら不気味な笑顔を浮かべた黒いのがリーダー格を連れて私たちから離れていった。何するつもりだあいつー？ あんな生き生きとしている黒いのは初めてみた……。

妙にぐつたりとしたリーダー格と、妙に肌がつやつやとしている黒いのが戻ってきた。ホントに一体何があつたんだ！？

「だいたい分かりましたよ、敵が」

「大丈夫か、お前……」

思わず敵のほうを心配してしまった。声をかけても放心状態でピクリとも反応しない。もとは仲間だつたはずなのに双子は怖がつて近づこうともせずリアの後ろに隠れている。ムムツ！ いつの間にリアに懐いたんだ、この二人！

「どちらかといえば、残念なお知らせになりますね。僕の予想が正しければですけど」

「誰が依頼人か分かったのか？」

「まだ僕の予想ですけどね。……たぶん、”あの人”が関わつてます。こいつも実際に依頼人の顔を見たわけではないそうなので、あくまで僕の予想になりますけど」

「……真相は進んでみないと分からぬ、か」

黒いのがいつになく真剣な顔をしているから、私をからかつて楽しんでいる可能性は低い。

もしあいつが関わつているなら、この先少し慎重に進まなければならにだろう。

「何がしたいんだよ、あいつ」

そこには不思議そうに私を見上げる双子が居た。

おこつの策略（後書き）

次回、隣村に入ります。

女の方の樂しみ（繪書き）

今日は盤匠が珍しく女の手仕事です。そしてまたリアは可哀想な子です。

師匠の二つ皿の名前も出します。

女の子の楽しみ

「やつとついた。結構ぎりぎりだつたわね」「隣村についたのは日も暮れかけたころ。双子を連れているといひを狼族に見られてたら面倒なことになつてたわ。双子はそこそこ大きな村に来るのは初めてらしく、きょろきょろとあたりを見回している。

「フィアとフイイは村に来るのは初めて?」

「狼は村とか集落とか作らないから、今日あの集落に行つたのが初めてなのー」

「のー」

「人がたくさんいるつてことは、何か作戦でも実行するのー?」

「うん、相変わらず弟はほとんど喋らない。にしても、作戦を実行するときしか人が集まらないなんて、この一人は一体どんな暮らしを送つてたんだ?」

「でも、作戦とかで人が集まるようになつたのは最近のことなのー」「それまではみんな自分の思うようにやつてたのー」

「それつて、どのくらい前なんですか?」

「うーんとね、2、3週間くらいー」

「いー」

それを聞いた黒いのの眼がほんの少しだけ、視覚強化した私だから気がつくほど少しだけ、険しくなつた。だがそれもすぐに消えて、もとの何も感情が無い眼に戻る。

……そういえばこいつ、眼に感情が浮かぶことって無いな。ふざけている時も、笑っている時も、怒っている時も眼だけは何も感情が浮かんでいない。唯一浮かぶのは私とあいつが対峙した時と、今日みたいに詰問（拷問か？）したときだけだな。

「師匠、もしかして何かまずいことでもあるんですか?」

「ううん、別に何もないわよ。ただ、ちょっと急がなきゃいけないかも。まあ、今日はもう移動するのは無理だと思うけど」

私は双子とリアに眼を向ける。何だかんだ言って、今日の強行移動は幼い体にはきつかったらしい。なんていったって、リアだってまだ12歳だしね。

「あ、そういえば、双子ちゃんは何歳なの？」

「12ですー」

「ですー」

嘘、このちびすけたちリアと同い年か。この3人を並べてみると、リアって結構大きいほうだったんだな。私も黒いのもわりと背は高いほうだから、全然気がつかなかつた。

「リア、良かつたわね。貴方はもうチビじゃないわ」

「だからいつも言つてたじやないですか！ 比べるもの間違えてたんですつて！」

懐かしいな、トーマと一緒にリアをチビチビ言つて追いかけまわしたのが。

「とりあえず、今日はこの村に泊るわよ。黒いの、どつか適当に宿屋探してきて。汚いとこと高いところ嫌よ！」

「相変わらず貴女は人に何か頼むときにつけて注文が多いですねえ」

そうブツブツ文句を言いながらも黒いのは宿屋を探しに行つた。あいつのことだから5分ほどでいい宿屋を見つけてくるだろう。匂いか？匂いで分かるのか？無駄にそんな能力がある黒いのであつた。

「さてと、私たちは私たちで買い物しちゃうわよ」

「買い物？」

「物ー？」

「そうよ。あんたたちのその耳を隠す帽子とか、私たちについてくるならそれなりの服とか用意しなきゃいけないからね」

まだ日が完全に落ち切つていないから双子はちらちらと見られる

だけで済んでいるが、日が完全に落ちれば狼族のスパイだとか言って村を叩き出されるだろう。いくら私たちがついていてもだ。

そして数分後、リアとフライ、そして途中から合流した黒いのは地獄を見ることになる。

「見てみてフライア！ これ似あうんじゃない？」

「あ、それもカワイイのー！」

満面の笑みで露店を眺めて回る師匠とフライア。そしてその後ろを荷物を抱え、辟易した顔でついていく男性陣3人。しかし女性2人は気がつかない。

「セーラさん、この黒いのと緑の、どっちが似合いますかー？」

「うーん、フライアだつたら緑かな？」

「じゃあ黄色にしますー！」

嬉しそうに緑色のマントを抱えて店主の元へと掛けていくフライア。やつぱり女の子だつたんだな。

セーラというのは私の名前。10年前に捨てた名前の代わりに私が自分でつけた名前だ。もっともこの名前を読んでいるのは現時点でのフライアとフライの2人だけだが。

「あのー、師匠？ そろそろ必要な物はそろつたんじゃないですか？ そろそろ宿屋に……」

「そうね、じゃあ……」

私の言葉に無言で顔を輝かせる男3人。そんなに嫌だつたのか、買い物が。その3人を見つめたままにやりと笑う。とたんに顔が凍りつく3人。

「じゃあ、今度は楽しいウインドウショッピングと行きますか」

「…………」

「ホントですか？ やつたー！」

無言で何かを諦めたような顔になる男3人と、両手を上げて無邪

「気に喜ぶフィア。……でも、小さいフィイにこれ以上つき合わせるのは酷かな？」

「でも、フィイは疲れたみたいだから黒いのと一緒に先に宿屋に行ってなさい。黒いの、宿屋の場所は？」

「ちょっと待つてください、師匠！ 僕は！？ 僕のフィイと同い年なんですけど！ 僕もかなり疲れたんですけど」

「あんたは私があんだけ鍛えたんだから平氣でしょ。荷物持ちになりなさい」

「鬼…………！」

「フィアちゃんもいるんですから、あんまり遅くならないでくださいね。リア、頑張ってください」

最後に本当に嬉しそうな顔で久々に笑つた黒いのが半分眠つているフィイをおんぶして先に宿屋へ向かった。

「さーて、今日はいっぱい買つぞー」

「おー！」

「やめてください！」

そしてその日、満面の笑みを浮かべた私とフィア、そして疲れ切つた顔で両手に荷物を抱えたりアが宿屋に入つたのは日もすっかり落ちて、そろそろ黒いが探しに行こうかとしていたころだつた。

女弟子の樂しみ（後書き）

セーラ 青蘭

本当は蘭で”ら”とは読みませんが、片仮名にしたときセーランは
ちょっと……とこつわけで、セーラとさせていただきました。
ちなみに何故師匠の一つ目の名前がセーラか分かりますか？ ヒン
トは元の名前です。

答えは次回のあとがきででも書きますかね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3745w/>

気ままに。

2011年10月8日03時25分発行